

## ミラーと永遠回帰について\*

入江 識 元

(平成8年6月20日受理)

### 要 旨

Nietzscheは今日に至るまで、我々に影響を与え続けている。その中であって、Henry Millerもまた、彼に感化されたアメリカの思想家に位置づけることができる。本論文では、Nietzsche哲学の種々の概念のうち、特に「永遠回帰」に焦点を絞り、そのMillerとの関わりについて解き明かしてゆく。この永遠回帰という概念には多くの誤解があるが、そのひとつに永遠回帰は「同じものへの回帰」を表す、といった類の誤解がある。ところが『ツァラトストラ』を分析すると、著者はこの永遠回帰の悪しき解釈を二度も繰り返し否定していることがわかる。つまり、永遠回帰は同一的なものへの回帰を意味しえないのである。というのも永遠回帰は、同一的なものとは反対に、すべての先行的な同一性が廃止され解消されるような世界（力の意志の世界）を前提にしているからである。『南回帰線』におけるMillerはNietzscheのこの意図を正確に受け継いでおり、それをさらに発展させている。Millerのすべての作品に繰り返し現れる「神経叢」や「卵巣」の概念、「分節化」や「微分化」の概念は、実は、Nietzscheの「永遠回帰」の遺産なのである。

### キーワード

永遠回帰、驢馬の「然り」、ヘーゲルの円環、平衡状態、宇宙論的な自我

### 1 イントロダクション

Nietzsche(1844-1900)は様々なレベルにおいて様々な作家に影響を与え、今日に至っている。また、文学理論に目を転ずれば、彼はいわゆるポスト構造主義を筆頭とする思想家たちにこそぞって取り上げられ、いまでは一大系譜を作り上げるまでになっており、Derrida, Foucault, Deleuze, Klossowski, Batailleといった、独自の理論を展開するような偉大な思想家も輩出されてきた。このよ

うに名前を並べてみてもわかるとおり、ドイツ人ニーチェの思想がもっとも受容されたのはフランスにおいてであって、それはそれなりに興味深いことではあるが、その中であって、文学人生の大半をパリにおいて過ごしたHenry Miller(1891-1980)もまた、こうした思想家に先行する、ニーチェに感化されたアメリカの一大思想家の一人と考えてよいと筆者は判断する。

本論文において永遠回帰というニーチェ哲学の神髄のひとつに触れるには、いささかた

めらいがないわけではない。それというのも、この永遠回帰なる用語が、輪廻転生と同レベルで誤り語られることが今日余りにも多いので、この用語を用いるならば、それ自体を今一度定義し直す必要があるからである。それ故、本論ではミラーよりニーチェに対する言及にウエイトが置かれることになるのを覚悟でこのテーマに挑みたい。

さて、ミラーにおける永遠回帰が本論文のテーマであるが、今回は特に、その思想が顕著に見られる代表作『南回帰線』を取り上げ、ニーチェからの出典は『ツァラトウストラ』に絞った\*<sup>1</sup>。また論ずる視点としては、『南回帰線』のなかに見られる「永遠回帰」とその周辺のテーマについて、ミラーからニーチェを見るのではなく、ニーチェからミラーを見る形式で進めて行くこととしたい。

先頃、弘文堂から『ニーチェ事典』が刊行され、ニーチェ研究家の間で注目を集めているが、その項目のなかに「ヘンリー・ミラー」の名前があることにまず注目しなければならない。

この作品（『北回帰線』）の冒頭でミラーは、「ぼくは諸君のために歌おうとしている。すこしは調子がはずれるかもしれないが、とにかく歌うつもりだ。諸君が泣き言を言っているひまに、ぼくは歌う。諸君のきたならしい死骸の上で踊ってやる」と記しているが、これがニーチェの『ツァラトウストラ』を下敷きにしていることは明かである。ミラーとニーチェの関係をもっともはっきりと示しているのは、D.H.ロレンスを評した彼の著書『ロレンスの世界』である。ここでミラーは同じニーチェの影響を受けたB.ショウとロレンスを対比し、ショウのように「肉体のない」人間ではなく、肉体の肯定を通じて疲弊したヨーロッパ文明に否を突きつけたとしてロレンスを評価している。この著書でミラーがニーチェと

シュペングラーを同じ位置づけで扱っていることは注目すべき点である。

ミラーが描き出す世界は、ロレンスに見られる一種のロマンティズムをいっさい払拭し、肉体のディオニュソスのオルギアに徹している点で、よりニーチェのツァラトウストラに近いといえよう。\*<sup>2</sup>

ミラーのロレンス論については別の機会に譲るとして、『南回帰線』においては「ツァラトウストラ」の名前は一度しか見ることができない\*<sup>3</sup>。「回帰」というのも日本語でのタイトルの上でのことで、「永遠回帰」といった明確な用語も皆無である。しかし、ニーチェやその周辺について研究を進める学者が『南回帰線』の名前をよく取り上げることは、彼らがニーチェ・ミラーの系譜を『南回帰線』に読む裏書きとなっているのである。\*<sup>4</sup>

## 2 永遠回帰の定義

### 2.1 誤解

..and everything fall back to ruin as has happened again and again. Another thousand years, or five thousand, or ten thousand, **exactly where I am standing now to survey the scene**, a little boy may open a book in a tongue as yet unheard of and about this life now passing, a life which the man who wrote the book never experienced, a life with deducted form and rhythm, with beginning and end..\*<sup>5</sup>.

What fascinates me is that anything so dead and buried as I was could be **resuscitated, and not just once, but innumerable times**. And not only that, but each time I faded out I plunged deeper than ever into the void, so that with each **resuscitation** the miracle be

comes greater. And never any stigmata! The man who is **reborn** is always the same man, more and more himself with each **rebirth**. He is only shedding his skin each time, and with his skin his sins. The man whom God loves is truly a right-living man. The man whom God loves is the onion with a million skins.\*<sup>6</sup>

(強調は筆者。以下同じ)

まず、「永遠回帰」のイメージが見られると思われるミラーの言説について少し引用してみた。この「永遠回帰」という言葉はたいへん誤解されやすい言葉である。それは円環の動き、或いはヘーゲル主義のイメージである螺旋の動き、即ち同一なもの、類似するものへの回帰を意味しやすい、という意味においてである。実際『ニーチェ事典』における「永遠回帰」の項目にもそのような誤解を招く記述がある。

例えば、歴史の全てが、いや自然も含めていっさいが「力への意志」のまったく偶然で無計画な戯れの産物であるとしたら、その戯れを司る原理というのはあるのだろうか。その戯れのありようはどのように形容できるのだろうか—このように問うことはできよう。答はこうである。時間が永久に続くとしたならば、すべてはいまいちど同じように展開する可能性を確率として秘めているのではなかろうか。悠久無限の時間のなかで有限のエネルギーがぶつかりあう以上、かつてあったのとまったく同じ配置も生じうるのではなかろうか。ちょうど、どんなに多くのさいころであっても飽きずにより続けていけば、いつかは同じ配置のさいの目がでると同じに—\*<sup>7</sup>。

「有限のエネルギー」「まったく同じ配置

を生じ得る」という表現自体が、ヘーゲル的であり、ニーチェとはおよそ無縁の説明だが、そもそも「永遠回帰」とは何回ものさいころ振りの目の回帰を意味するのだろうか。

『ツァラトゥストラ』の「日の出前」に次のような場面がある。ひび割れた「天空」に、打ち砕かれた「大地」が答える場面である。

おお、わたしの頭上の空よ、おまえ、清らかなものよ、深い者よ。おまえをじっと見ながらわたしは神的な欲念に震える。……

私にとっておまえの清らかさとは、そこになんらの永遠的な理性蜘蛛とその蜘蛛の巣がないということなのだ。またおまえがわたしにとって神的な偶然が踊る踊り場であるということ、神的なさいころと神的なさいころ遊びをする者にとっての神的な卓であるということなのだ。\*<sup>8</sup>

また別の場面では「天空」が「大地」に答える場面がある。

わたしがかつて、大地という神々の卓で神々とさいころの遊びを競い、そのために地が震い、破れ、火の河流を噴き出すに至ったとするなら、つまり、大地は神々の卓であって、創造的な新しいことばと神々の投げ交わすさいころとで震えているのだ。\*<sup>9</sup>

ここでニーチェは二つの時間を想定していることがわかる。即ち、さいころが投げられる「大地」の時間と、さいころが落下する「天空」の時間である。重要なのはこの二つの時間が同一の世界で想定されているということ、そして何回ものさいころ振りではなく、ただ一回のさいころ振りが問題とされているということである。さいころが投げ上げられる「天空」が「偶然」の時間を構成するとすれば、さいころが落下する「大地」は「運命」の時間として定義することができる。このよ

うに、「偶然」は「運命」と対極にあるものではなく、表裏一体をなしていることがわかる。ニーチェにとって「運命」とは、「偶然」の組み合わせにほかならない。先に引用した『ニーチェ事典』における誤りの箇所では、偶然の問題を、多くのさいころ振りに基づく確率の問題にすり替えているのである。

さいの一擲にあなたがたは失敗したのだ。しかし、賭博者たちよ、そんな失敗が何だろう。あなたがたは、賭博者、そして嘲笑者としての心がけを学んでいなかったのだ。<sup>\*10</sup>

ツァラトゥストラのこの非難は賭博者たちが戯れとしてではなく、勝敗にこだわることのおろかさを非難しているのである。多くのさいころ振りによって確率を問題とすることは、ちょうど、勝ち負けにこだわり、道徳に関わるということであり、恒常的な規則の同一性に服従するということなのだ。従って、戯れとしてのさいころ振りはただ一度の偶然を問題にすることとなる。これに近いニュアンスがミラーの言説にも表れている。

It was not a continuation of life, but a leap in the dark and no possibility of ever coming back, not even as a grain of dust. And that was right and beautiful, I said to myself, because why would one want to come back. **To taste it once is to taste it forever—life or death.** <sup>\*11</sup>

この引用に表現されている「一度味わうということは永劫を味わうということ」は、一度が全体を肯定することであり、一が多を肯定することである。先のさいころ振りの事例で言えば、ただ一回のさいころ振りが、偶然を肯定するのであり、さいころ

を振るたびごとに、「その都度」<sup>\*12</sup>偶然の全体を肯定しているのである。

## 2.2 永遠回帰を二度問うこと

『ツァラトゥストラ』のテキストの内容から、我々は、永遠回帰が二回問われていることがわかる。一回目は、第三部の「幻影と謎」において、侏儒、道化が語るときであり、二回目は、同じく第三部の「快癒しつつある者」において、動物達が語るときである。

「このうしろへの道、それは永劫へとつづいている。それから前をさして延びている道—それは別の永劫に通じている。この二つの道は相容れない。たがいに角つきあいをしている。だが、この門で、両者が行き会っている。この門の名は、上にかかげられているとおりに、「瞬間」である。ところで、この二つの道の一つをさらに先へ—どこまでも先へ、どこまでも遠く進む者があるとして、侏儒よ、この二つの道が永遠に相容れないものであると、おまえは信ずるか」

「すべてまっすぐなものは偽り者である」と、侏儒はさげすむようにつぶやいた。

「あらゆる真理は曲線である。時も円環をなしている」

「重さの霊よ」とわたしは怒りをあらわにして言った。「あまりに手軽に考えるな。・・・すべて歩むことのできるものは、すでにこの道を歩んだことがあるのではないか。すべて起こり得ることは、すでに一度起こったことがあるのではないか、この道を通り過ぎたことがあるのではないか。そして一切がすでにあったことがあるなら、侏儒よ、おまえはこの瞬間をどう考えるか。瞬間というこの門もすでに—あったことがあるにちがいないのではないか。<sup>\*13</sup>

うしろへの道、これは過去であり、前へ延

びる道、これは未来のことを指す。門、或いは瞬間とは、現在のことである\*14。

さて、「あらゆる真理は曲がっており、時間はそれ自体円環である」と侏儒\*15が言うとき、なぜ最初にツァラトウストラは、怒りに震えるのだろうか。なぜなら彼は、永遠回帰が「すべての」「同じ」ものの、そして「似ている」ものの回帰を意味するのではないかと恐れているからである。ツァラトウストラはすでに、時間がひとつの円環であることを否定し、侏儒にこう答えている。即ち「重さの霊よ。あまりにも手軽に考えるな。」先ほども述べたが、ヘーゲルの円環は永遠回帰ではなく、否定性を通じての同一的なものの無限な循環でしかない。

それでは、二回目の問いかけを見てみることにしよう。

一切は行き、一切は帰る。存在の車輪は永遠にまわっている。一切は死んでゆく、一切はふたたび花咲く。存在の年は永遠にめぐっている。一切はこわれ、一切は新たにつぎ合わされる。存在という同一の家は永遠に再建される。一切は別れあい、一切はふたたび会う。存在の円環は、永遠に忠実におのれのありかたをまもっている。一瞬一瞬に存在は始まる。それぞれの「ここ」を中心として「かなた」の球はまわっている。中心は至るところにある。永遠の歩む道は曲線である。\*16

「おお、おまえたち道化師よ、手回しオルガンよ。もう黙るがいい」と、ツァラトウストラは答えて、かれの生き物たちに微笑を投げた。「なんとよくおまえたちは知っていることか、わたしがこの七日のあいだにわたし自身のために、どんな慰めを考えついたかを。わたしはふたたび歌いださねばならない。この慰めを、この快癒を、わたしはわたし自身のために考えついたのだ。

おまえたちはこのことをも早くも手回しオルガンの歌にしてしまうつもりか。」\*17

このように、ツァラトウストラは二度繰り返して永遠回帰の悪しき解釈を訂正する。手回しオルガンの歌とは循環としての、「似ている」とか「等しくある」ものとしての永遠回帰である。ツァラトウストラは、手回しオルガンが繰り返す際、永遠回帰の真理を、同一的なものの循環に組み入れてしまうことを不快に思うのである。この二つの訂正から、永遠回帰は「同一的な」ものの回帰を意味しえないことがわかる。ついでながら、この永遠回帰を認識するその瞬間もまた、回帰するというツァラトウストラの経験も永遠回帰の重要な要素であることに注意を促しておきたい。

### 3 「ツァラトウストラ」の諸相

#### 3.1 脱ヘーゲル主義としての「肯定」

One thing is certain, that when you die and are resurrected you belong to the earth and whatever is of the earth is yours inalienably. You become an anomaly of nature, a being without shadow; you will never die again but only pass away like the phenomena about you.\*18

注目したいのは、「影を持たない存在」というワン・フレーズである。これの直接の意味は、変則的、異例的存在になるので、通常の地球上の存在のような影を持たなくなる、といったことであろうが、ここにも、ツァラトウストラの影をみてとることも可能なのである。

わたしの影がわたしを呼ぶのか。わたしの影がわたしに何のかかわりがあるというの

だ。かれがわたしを追いかけるなら、わたしは逃げて走ろう。\*19

或いは次のような表現もある。

おまえ、愚かな、鈍重な、うっとうしい昼よ。真夜中のほうが、おまえより明るいのだ。

最も清らかな者が、地の主となるべきなのだ。最も知られていない者、最も強い者、どんな昼よりも明るいんだ、深い真夜中の魂をもつ者が、地の主となるべきなのだ。……去ってしまった、去ってしまった。おお、青春よ、おお、正午よ、おお、午後よ。そしていま夕べと夜と真夜中が来た、犬がほえる、風がほえる。\*20

自分の影をうっとうしがらるツァラトウストラ。彼が真夜中を肯定するのは、影ができないからである。影とはニーチェにおいては自己にまわりつく否定的要素のことである。そして、真夜中の他に影が全く消えてしまう瞬間は正午である。この全く対立的な二つの契機が、否定的要素を消すこと、即ち肯定には必要なのである。『南回帰線』において「イエス」を連発するミラーが\*21「影を持たない存在」を想定するのも頷けることだろう。ツァラトウストラにもこれに似たエピソードがある。比較すればミラーの「イエス」の意味するところが明らかになる。

驢馬はそれにたいして「然り」と鳴いた。かれは語らない。語るのは、かれが創造した世界にたいしていつも「然り」と言う、そのときだけである。\*22

ツァラトウストラの驢馬が「然り」と鳴くこのエピソードは何を表すのだろうか。ニーチェはここにおいて、いかなる「否定」も含まない驢馬の「然り」を非難しているのである。

驢馬の「然り」は偽りの「然り」である。「否定」を表現すべきときにも「然り」と言うからである。しかしこの驢馬にとっていかなるときにおいても肯定するということは、ありのままの現実を受け入れるということ、即ち重荷を背負うことなのである。これはいかにもキリスト教的精神を表したものといえよう。例えばミラーの作品においても驢馬はしばしば登場する。これもキリスト教的な者、或いはのろまで愚かな者への揶揄を表すと考えてもいいかもしれない。しかしながら、死に対しても積極的に「イエス」を発する先ほどのミラーの肯定と、この愚かな驢馬を同一化することはできない。永遠回帰的な肯定と、キリスト教的な重荷の「イエス」とは全く相いれないものである。

ここで、少し掘り下げて考えてみよう。まず、否定が肯定を作り出す力となる場合を想定する。否定的なものに肯定する驢馬のことを指して述べたのだが、これはまさしくヘーゲルのアウフヘーベンの問題である。アウフヘーベンというドイツ語は、ヘーゲルにおいては「保存する」「否定する」「高める・持ち上げる」の組み合わせで用いられることになっている\*23。否定が肯定を作り出せるのは、否定される筈のものを保存しているからである。ニーチェが驢馬のエピソードで指摘したのは、否定される筈のものを保存し、何でも「然り」と答えるといったヘーゲル的保守主義なのである。ミラーの肯定の場合、それは否定を排除した肯定である。それ故、驢馬が古い価値を守る者とすれば、ミラーは新しい価値を創る創造者なのである。否定から出る肯定は限定されたものであるが、肯定とは多様なものであるべき、というミラーの考えはニーチェと重なるものがある。

### 3.2 「永遠回帰」におけるイマージュ

そして月光をあびてのろのろと這っているこの蜘蛛、またこの月光そのもの、また門

のほとりで永遠の事物についてささやきかわしているわたしとおまえ、これらはみなすでに存在したことがあるのではないか。そしてそれらはみな再来するのではないか、われわれの前方にあるもう一つの道、この長いそら恐ろしい道をいつかまた歩くのではないか、われわれは永劫に再来する定めを負っているのではないか」

私はこう語った、そして語りながらいよいよ声を低めた。わたしはわたし自身の思い、そしてその底にひそむ思いに恐怖の念をいだいた。と突然近くで、一匹の犬の吠えるのが聞こえた。わたしは、犬がこのように吠えるのをいつか聞いたことがあるだろうか。わたしの思いは過去へ馳せた。そうだ。わたしが子供のときのことだ、遠いあのころのことだ。

そのときわたしは犬がこのように吠えるのを聞いた。そして毛を逆立て、頭をおこして、身をふるわせながら吠えているその犬の姿をも見た。犬でさえ幽霊を信ずる静まり返った真夜中に。<sup>\*24</sup>

『ツアラトウストラ』における永遠回帰のイメージは、このような月光、蜘蛛、真夜中といったものである。これはニーチェ自身の少年時代の経験が反映されているのだ、とする説もある。

それに対し、深さ、どん底、洞窟、等しくないもの、これらが『ツアラトウストラ』に触発された、ミラーの永遠回帰の風景を形成するものといえる。ミラーにおいて永遠回帰に表れるイメージは具体的に言えば、洞窟であったり、海底であったり、森の道の真夜中の散歩、であったりするわけである。

We started walking again, up and down over the meadows, as though we were walking under the sea.<sup>\*25</sup>

海は、ニーチェの永遠回帰の風景によく登場する。ニーチェにとって海とは、その広がりや深さのため、生命の比喩であると同時に、人類のいまだ到達し得ない世界への回帰を表す。

真夜中はミラーにとって好きな時間であったようで、真夜中を散歩するシーンや、真夜中に思索するシーンがよく見られる。この真夜中については実際、テキストにmidnight lucubrations という語も使われている。<sup>\*26</sup>

I longed for an earthquake, for some cataclysm of nature which would plunge the lighthouse **into the sea**. I wanted a metamorphosis, a change to fish, to leviathan, to destroyer. I wanted the earth to open up, to swallow everything in one engulfing yawn. I wanted to see the city buried fathoms **deep in the bosom of the sea**. I wanted to sit **in a cave** and read by candlelight. I wanted that **eye extinguished** so that I might have a chance to know my own body, my own desires....I wanted **something of the earth which was not of man's doing, something absolutely divested of idea.**<sup>\*27</sup>

或いは次のような表現もある。

Until we were pushed out to work the world was very small and we were living on the fringe of it, on the frontier, as it were, of the unknown. A small Greek world which was nevertheless **deep enough** to provide all manner of variation, all manner of adventure and speculation. Not so very small either, since it held in reserve **the most boundless potentialities.**<sup>\*28</sup>

これらの引用において、深さ、大きさを持つ世界とは、ミラーの少年時代のことを指している。少年時代の思い出と、永遠回帰のイメージには共通するものがあり、このこともニーチェのそれと似ているようである。

### 3.3 平衡状態へ批判

I understood why, if there had never been a **binominal theorem**, man would have invented it;... \*<sup>29</sup>

ミラーがここで提示するのは、2という数字が、我々を分別し、ふるいにかけ、ヒエラルキーをつくるのに便利な数字であるという事実である。これもまたヘーゲルの血筋を引くものである。先ほどの驢馬の例で言えば、驢馬の肯定を非難した理由は、それが否定との対立から生まれたものであるからであった。対立構造とは、たとえそこに発展なるものがあったとしても、ヘーゲルの円環から抜け出すことはなく、同じ中心の周りを回っているに過ぎない。つまり、2という数字も同じものへの回帰に加担しているのである。ミラーの求めているのは、「卵巣」という言葉でしばしば登場するイメージ、すなわち、無限かつ微小で、隙間に入り込むようなイメージ、網の目のような神経叢<sup>フレクサス</sup>\*<sup>30</sup>、常に中間にいること、木と木の間にあること、雑草であることなのである。

I was like an **equals sign** through which the algebraic swarm of humanity was passing. I was a rather important, active **equals sign**, like a general in time of war, but no matter how competent I were to become I could never change into a **plus or a minus sign**. Nor could anyone else, as far as I could determine. Our whole life was built up on

**this principle of equation**. The integers had become symbols which were shuffled about in the interests of death. Pity, despair, passion, hope, courage—these were the temporal refractions caused by looking at **equations** from varying angles. \*<sup>31</sup>

或いは次のような箇所もある。

And with the first step you make in this direction you realize that there is neither plus nor minus; \*<sup>32</sup>

永遠回帰は、平衡状態に対する批判が前提となっている。例えばエネルギー保存の法則は、最初の状態と最終状態が均衡を保っていることを表すが、それは同一なものへの回帰を表すのである\*<sup>33</sup>。ミラーの問う「重力の法則(the law of gravity\*<sup>34</sup>)」も potential energyと kinetic energyの間での平衡状態の一つの例にすぎない。仮に平衡状態が存在したとする。もしそうであれば、ある事態はすでに実現されているはずであり、改めて生まれること、すなわち「生成」は有り得ない。それではなぜその事態は生成したのだろうか。平衡状態の矛盾はここにある。存在すれば生成は否定される。しかし、生成はある故、存在は否定されることになる。このように、永遠回帰とは同一なものへの回帰ではなく、つまり平衡状態に加担するものではなく、常に生成の存在を確認するものである。

さて、同一的なものへの回帰にたいする批判は、ミラーにおいて「差異」へのあこがれとなって表れる。

The moment you have a “**different**” thought you cease to be an American. And the moment you become something **different** you find yourself in Alaska

or Easter Island or Iceland.\*<sup>35</sup>

All things, all objects animate or inanimate that are *different*, are veined with ineradicable traits. What is me is ineradicable, because it is *different*. \*<sup>36</sup>

これらの引用のなかにおける、different という単語はポスト構造主義者が多用する語である。彼らの多くがそうであるように、ミラーもまた、「差異」へのあこがれを表明しているのであり、自己を「差異化」することを欲するのである。具体的に言えば、作中において彼がしばしば告白する、アメリカ人以外の誰かになること、すなわちユダヤ人や中国人へのあこがれなのであり、或いは「人間的なるものとは完全に絶縁した何か」例えば「蜘蛛」になることであったり「大地」そのものになることなのである \*<sup>37</sup>。

There was a resurrection which is inexplicable unless we accept the fact that men have always been willing and ready to deny their own destiny. The earth rolls on, the stars roll on, but men, the great body of men which makes up the world, are caught in **the image of the one and only one**.

If one isn't crucified, like Christ, if one manages to survive, to go on living above and beyond the sense of desperation and futility, then another curious thing happens. It's as though **one had actually died and actually been resurrected again**; one lives a supernormal life, **like the Chinese**. That is to say, one is unnaturally gay, unnaturally healthy, unnaturally indifferent. The tragic sense is gone: one lives on **like a flower, a rock, a tree**, one with Nature

and against Nature at the same time.\*<sup>38</sup>

ミラーがキリスト教を批判するのは、「人類のあらゆる否定的な跳躍が停滞し怪物じみた塊の中にかき集められ、人間的な整数の典型、一という数字、分かちがたい結合単位を生み出した」からである。永遠回帰が本質的に死と関係しているのは、永遠回帰が、神の死を、即ち「一」であるものの死を含んでいるからである。この引用でわかるのは、ミラーの中国人へのあこがれ、このキリスト教的な一という数字を多に変えることへのあこがれである。ところで彼はどのようにして自己を分解するのだろうか。実はそのために、彼は作品のなかで動物になったり、花または岩になったり、さらにまた、知覚しえぬものになったりするのである。自らの顔を解体すること、それがミラーの目論見なのだ。

#### 4 結論－永遠回帰から宇宙的な自我へ

In the dark, locked away in the black hole with no world looking on, no adversary, no rivals, the blinding dynamism of the will slowed down a bit, gave her a molten copperish glow, the words coming out of her mouth like lava, her flesh clutching ravenously for a hold, a perch on something solid and substantial, something in which to reintegrate and repose for a few moments. It was like a frantic long-distance message, an SOS from a sinking ship.\*<sup>39</sup>

閉ざされたブラック・ホール。赤い銅色の光。女性の顔と火山の噴火口の重ね合わせ。ブラック・ホールとはまさしく我々の顔であり、自我なのである。我々に課せられた問題はそこから抜け出すことである。それも精神

的なものによってではなく、生きることによって、現実の生活の中で抜け出すことである。どのように抜け出すのか、そのヒントをミラーは提示する。

I no longer look into the eyes of the woman I hold in my arms but I swim through, head and arms and legs, and I see that behind the sockets of the eyes there is a region unexplored, the world of futurity, and here there is no logic whatever, just the still germination of events unbroken by night and day, by yesterday and tomorrow. The eye, accustomed to concentration on points in space, now concentrates on points in time; the eye sees forward and backward at will. The eye which was the I of the self no longer exists; this selfless eye neither reveals nor illuminates. It travels along the line of the horizon, a ceaseless, uninformed voyager. Trying to retain the lost body I grew in logic as the city, a point digit in the anatomy of perfection. I grew beyond my own death, spiritually bright and hard. I was divided into endless yesterdays, endless tomorrows, resting only on the cusp of the event, a wall with many windows, but the house gone. I must shatter the walls and windows, the last shell of the lost body, if I am to rejoin the present.

**That is why I no longer look into the eyes or through the eyes, but by the legerdemain of will swim through the eyes, head and arms and legs, to explore the curve of vision...I have broken the wall created by birth...\***<sup>40</sup>

顔を壊すこと、自我を壊すことを言い替えば、この引用にあるように壁を壊すこととなる。ところで、女性を胸に抱きながら、女性の目の中をのぞきこむのではない、とは如何なることか。実は目の中をのぞきこむという行為は、精神的な行為であり、実存的な行為、自我に加担する行為である。ミラーの理想はむしろ没我的な目でさまようこと、「宇宙的な目」で地平線の彼方を横断すること、そして非人間的なものに生まれ変わることなのである。

Once you become a real **schizerino flying** is the easiest thing in the world; the trick is to fly...only with your **immutable self...**<sup>\*41</sup>

前の引用を言い替えばこのような「分裂症的な飛翔」といったことになる。「不変の自我」とは決して同一性の肯定ではない。それは個人のものではなく、没我的な、根源的な宇宙的な自我というものなのだ。

さて、これまで見てきたことから結論づけられるのは次の通りである。いわゆる永遠回帰とは同一なるものへの回帰を意味するのではないと言うこと、すなわち、「回帰する」とは「差異」を、或いは「微分化」を裏書きしたものにすぎないものだ、という事実である。ミラーはそこのところを感覚的に読みとっていた。そして、さらに重要なのは、彼が永遠回帰という哲学概念を、実人生の中に読みとっていたということである。そして、その思想の神髄には、ミクロコスモスの世界はマクロコスモス的世界へと開かれているという Bergson の思想の応用も見て取ることができるのである。ミラーの哲学が実人生の中での人間の分節化、微分化から、宇宙論的な分節化へと展開するのも、ニーチェ思想にベルクソンの哲学を援用しているからだといえる。しかしながら、ベルクソンについてこれ以上

言及することは本論の趣旨を逸脱することになるため、別の機会に譲ることとしたい。

## 注 釈

- \* 本稿は日本ヘンリー・ミラー協会第2回大会（1995年10月28日，早稲田大学国際会議場）での口頭発表をもとに加筆，修正したものである。
- \* 1 『南回帰線』のテキストにはMiller, Henry, *Tropic of Capricorn*, NY:Grove Weidenfeld, 1961,を使用した。また、『ツァラトストラ』のテキストについては，ニーチェ『ツァラトストラ』手塚富雄訳（手塚富雄責任編集『ニーチェ』世界の名著46，中央公論社，1966年）を使用した。
- \* 2 三島憲一他編集『ニーチェ事典』弘文堂，1995年，p.614. 尚，引用中におけるディオニュソスとは，アポロンと対立する，いわゆるバッカスの神のことで，ニーチェにとっては，アポロンの「夢」にたいして提示される「陶醉」の神である。ミラーのテキストでは，euphoriaという単語でそれは登場するが，ミラーの「陶醉」は，文字どおりの，酒やセックスに酔うことを意味する他に，概念的なもの，特に外に対して向けられた欲動への「酔い」が存在する。今，外に対して，と筆者は言ったが，内に対して向けられた欲動ならそれはナルシズムと呼ばれるものになるからである。ミラーはナルシストでは断じてない。もし仮に，ミラーが否定的な，反動的な力を表現する者であれば，他者を対立させることによって，他者を意識せざるを得なくなり，「陶醉」に浸ることはできなくなるだろう。ところがミラーは「肯定」の人間，「イエス」の人間である。これは何にでも「ヤー」と鳴く驢馬の肯定とは異なり，積極的な肯定の「イエス」である。このことから，ミラーの「陶醉」は，いわゆるディオニュソス的陶醉と重なるものがあるのである。
- \* 3 Miller p.106.
- \* 4 ちなみに永遠回帰（ニーチェの原語ではewige Wiederkunft）を英語，フランス語ではそれぞれ eternal return(recurrence), retour eternelと言うが，retourという単語はミラーの作品のタイトルにも入っている。*Aller Retour New York*というのがそれで，これは最初，限定版として1935年にパリで出版された。合衆国で刊行されたのはその十年後のことであり，それも，“Printed for Private Circulation Only”という条件付きであった。
- \* 5 Miller p.70.
- \* 6 *ibid* pp.230-31.
- \* 7 三島他 p.45.
- \* 8 ニーチェ III-4, 「日の出前」pp.250-54.
- \* 9 同上書 III-16.3「七つの封印」p.334.
- \* 10 同上書 IV-13.14「高人」p.406.
- \* 11 Miller p.91.
- \* 12 「その都度」というフレーズは骰子一擲のキーワードである。
- \* 13 ニーチェ III-2.2「幻影と謎」p.243.
- \* 14 これら，現在，過去，未来の関わりについてはベルクソンの「持続」や「時間と記憶」の問題であり，別途の機会を設けなくてはならない。
- \* 15 侏儒とはこびと，一寸法師のことである。

- \* 16 ニーチェ III-13.2「快癒しつつある者」 p.318.
- \* 17 同上書, 同章節 p.321.
- \* 18 Miller p.64.
- \* 19 ニーチェ IV-9「影」 p.382.
- \* 20 同上書 IV-19.8「酔歌」 p.442.
- \* 21 Miller p.290.
- \* 22 ニーチェ IV-17.2「覚醒」 p.431.「驢馬は「ヤー」としか鳴かない。神はおのれが創った世界を是認する。」(旧約「創世記」1の31)
- \* 23 ヘーゲルのアウフヘーベンについては、拙稿「無意識と記憶」(『高岡短期大学紀要』vol.7)のp.78注の4を参照されたい。
- \* 24 ニーチェ III-2.2「幻影と謎」 p.244.
- \* 25 Miller p.84.
- \* 26 *ibid* pp.185-86.
- \* 27 *ibid* p.76.
- \* 28 *ibid* p.145.
- \* 29 *ibid* p.250.
- \* 30 プレクサス(Plexus)はミラーの作品のタイトルである。
- \* 31 Miller p.322.
- \* 32 *ibid* p.331.
- \* 33 注7の『ニーチェ事典』の引用において、「有限のエネルギーがぶつかりあう」という表現があった。これもここでの平衡状態と同意である。
- \* 34 Miller p.327.
- \* 35 *ibid* p.56.
- \* 36 *ibid* p.57.
- \* 37 *ibid* p.101.
- \* 38 *ibid* pp.63-64.
- \* 39 *ibid* p.239.
- \* 40 *ibid* pp.121-22.
- \* 41 *ibid* p.206.

## 'Eternal Return' and Henry Miller

Nobumoto IRIE

(Received June 20, 1996)

### ABSTRACT

The aim of this thesis is the close re-examination of the famous concept of 'eternal return' in Nietzsche's *Also sprach Zarathustra* and the pursuit of Henry Miller's inheritance of the concept from Nietzsche. Nietzsche has had a great influence upon many writers at various levels. Henry Miller is also one of these influenced writers in America. Many philosophers, including noted philosophers, have misunderstood what the concept tells us; in short, they recognize it as the return of the Identical. As it is, Nietzsche does not have the slightest idea of this, because on two occasions, Zarathustra corrects the erroneous interpretations of the eternal return. Eternal return cannot mean the return of the Identical because it presupposes a world (that of the will to power) in which all previous identities have been abolished and dissolved.

Reading Miller's masterpiece *Tropic of Capricorn*, we can easily realize that he properly inherited the concept from *Zarathustra*, furthermore, he developed it according to his original concepts, such as 'plexus' 'ovarium'. Among other things, 'differentiation' is the one that contemporary philosophers, including post-structuralists, frequently use in their noted theories. Far from the return of the Identical, 'eternal return' means re-creation, as it were, the return of the 'differentiation'.

### KEY WORDS

Eternal return, The Ass' yea, Hegel's circle, Equation, The cosmological ego